	一般的名称	報告の概要
674	フルコナゾール	健康男性16例を対象とした非盲検非無作為化研究において、フルコナゾールとbifeprunoxの併用によりbifeprunoxのAUCやCmaxが増加した。
675	エポエチンα（遺伝子組換え）	化学療法または放射線療法を受けていない癌を有する貧血患者1473例を対象とした多施設無作為化二重盲検プラセボ対照試験において、ダルベポエチン群で生存期間の短縮が認められた。
676	ダルベポエチン　アルファ（遺伝子組換え）	化学療法または放射線療法を受けていない癌を有する貧血患者1473例を対象とした多施設無作為化二重盲検プラセボ対照試験において、ダルベポエチン群で生存期間の短縮が認められた。
677	リツキシマブ（遺伝子組換え）	成人リンパ腫患者338例のうち、移植前後にリツキシマブを投与した群において、ウイルス感染が4例認められ、リツキシマブ非投与群では認められなかった。
678	ランソプラゾール	プロトンポンプ阻害剤投与により、カンピロバクター及びサルモネラ胃腸炎の感染リスクが高まることが示唆された。
679	リセドロン酸ナトリウム水和物	患者データベースを用いて65歳以上の心疾患を有する無腐性骨壊死患者196例、コントロール1960例のケースコントロール研究において、ビスホスホネート製剤投与により無腐性骨壊死のリスクが高まることが示唆された。
680	ヨウ化ナトリウム（131I）	放射性ヨード治療を受けた甲状腺機能亢進症患者2739例とコントロール2739例を対象としたコホート研究において、前群で脳血管疾患による死亡率とがんによる死亡率（特に胃癌）が上昇することが示唆された。
681	プロピオン酸ベクロメタゾン	妊娠初期にコルチコステロイドを使用していた母親から生まれた児において、口唇口蓋裂となるリスクが高まることが示唆された。
682	カベルゴリン	カベルゴリン長期投与中のプロラクチノーマ患者において、健常者と比較すると心臓弁膜症のリスクが増加することが示唆された。
683	塩酸バンコマイシン	ボツワナのさまざまな施設に所属する200例の食品取扱者から分離された204株の黄色ブドウ球菌株のうち、9株がバンコマイシン耐性を示した。
684	塩酸バンコマイシン	デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンの16施設の患者から分離された黄色ブドウ球菌株からバンコマイシンに対するMICが8mg/mLのものが2件報告された。
685	塩酸バンコマイシン	エジプトの国立がん研究所で血液がん及び固形がん患者から分離された黄色ブドウ球菌の15.5%がバンコマイシン耐性、3.5%が中等度耐性であった。
686	レボフロキサシン	キノロン製剤を投与された心臓移植患者149例の診療記録の調査において、14例にアキレス腱障害が認めら、うち3例が腱断裂、8例が両側性腱障害であった。危険因子は腎機能障害、移植から治療までの期間の延長であった。
687	オメプラゾール	冠動脈ステント留置後にアスピリンおよびクロピトグレルを投与している患者126名において、オメプラゾンの併用により抗血小板作用が現弱することが示唆された。
688	エポエチンβ（遺伝子組換え）	腎性全身性線維症患者8例とコントロール24例を対象としたケースコントロール研究において、エリスロポエチンの投与がケース群で有意に多かった。
689	インドメタシン	早期出産児にインドメタシンを投与すると、未熟児網膜症の発現頻度が高まることが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
690	インドメタシン	15の後ろ向きコホート研究と6つの症例比較対照試験によるメタアナリシスにより、妊婦への出産前インドメタシン投与は、新生児での脳室周囲白質軟化症と壊死性腸炎の発症リスクを高めることが示唆された。
691	ヘパリンナトリウム	一医療機関においてヘパリンを投与されたHIV感染患者53例と非感染患者106例を対象としたレトロスペクティブコホート研究において、HIV感染患者ではHITの発生率が高いことが示唆された。
692	アセトアミノフェン	インフルエンザに罹患した国内の小児において、アセトアミノフェンを使用している群は、未使用群と比較して、意識障害の発現リスクが高まることが示唆された。
693	アレンドロン酸ナトリウム水和物	患者データベースを用いて65歳以上の心疾患を有する無腐性骨壊死患者196例、コントロール1960例のケースコントロール研究において、ビスホスホネート製剤投与により無腐性骨壊死のリスクが高まることが示唆された。
694	塩酸イリノテカン	進行性非小細胞肺癌の韓国人患者81例を対象としたイリノテカン/シスプラチン併用化学療法の第Ⅱ相試験において、有機アニオン輸送ポリペプチド1B1(OATP1B1)の遺伝子多型を持つ患者で重度の好中球減少症や重度の下痢の発現率が高かった。
695	ホリナートカルシウム	75歳以上の大腸癌患者55例を対象としたロイコボリン/テガフール・ウラシル療法の第Ⅱ相多施設共同単群非盲検試験において1例が脳血管虚血により死亡した。
696	レボホリナートカルシウム	結腸癌または直腸癌を完全に切除した患者3239例を対象としたレボホリナートカルシウム/フルオロウラシルによる補助化学療法群と観察群を比較した無作為化試験(QUASAR試験)において、補助化学療法群で1例が死亡した。
697	ホリナートカルシウム	局所進行直腸癌患者155例を対象としたフルオロウラシル/ロイコボリン静注投与とテガフール・ウラシル/ロイコボリン経口投与を比較した多施設ランダム化試験において、前群で1例が急性の白血球減少症により、1例が急性腸穿孔により、2例が遅発性消化管合併症により死亡した。また、後群では外科手術の重篤合併症により1例が死亡した。
698	インターフェロンベータ-1b(遺伝子組換え)	インターフェロンベータ治療歴のある日本人多発性硬化症患者308例に対するアンケートの解析において、抗AQP4抗体/NMO-IgG陽性群では効果不十分ないしは無効、原疾患の増悪により中止に至る例が多かった。
699	塩酸フルラゼパム	透析患者において、フルラゼパムを含むベンゾジアゼピン系製剤を使用している患者において死亡率が高まることが示唆された。
700	フルコナゾール	12例の健常人を対象とした無作為化交差試験において、ボリコナゾールあるいはフルコナゾールがフェンタニルの消失時間を遅延させることが示唆された。
701	ジアゼパム	透析患者において、フルラゼパムを含むベンゾジアゼピン系製剤を使用している患者において死亡率が高まることが示唆された。
702	ホリナートカルシウム	動脈内化学療法を受けた進行膵癌患者211例を対象としたレトロスペクティブ研究において、1例が突然死により死亡した。
703	ブデソニド	長期間(少なくとも7年間)吸入副腎皮質ステロイド治療を受けている患者において、大腿骨頚部の骨密度が減少することが示唆された。
704	エチドロン酸二ナトリウム	患者データベースを用いて65歳以上の心疾患を有する無腐性骨壊死患者196例、コントロール1960例のケースコントロール研究において、ビスホスホネート製剤投与により無腐性骨壊死のリスクが高まることが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
705	アレンドロン酸ナトリウム水和物	患者データベースを用いて65歳以上の心疾患を有する無腐性骨壊死患者196例、コントロール1960例のケースコントロール研究において、ビスホスホネート製剤投与により無腐性骨壊死のリスクが高まることが示唆された。
706	塩酸セルトラリン	50歳以上の成人において、SSRIを日常的に使用している患者では骨折、転倒、大腿骨頚部や脊椎の骨塩密度の低下率が高まることが示唆された。
707	クロナゼパム	透析患者において、フルラゼパムを含むベンゾジアゼピン系製剤を使用している患者において死亡率が高まることが示唆された。
708	ジアゼパム	透析患者において、フルラゼパムを含むベンゾジアゼピン系製剤を使用している患者において死亡率が高まることが示唆された。
709	ヘパリンナトリウム	カテーテルを使用した血液透析を受けている患者559例の796のカテーテル中141で敗血症が発現し、ヘパリンの中間急速静注がリスク因子であった。
710	リファンピシン	健康男性10例を対象とした非盲検無作為化二方向性クロスオーバー試験において、リファンピシンとリスペリドンの併用により、リスペリドンのAUCや最高血漿中濃度が有意に減少した。
711	トフィソパム	16例の白人健康男性において、トフィソパムとミダゾラムの併用により、ミダゾラムのAUC、Cmaxが増加することが示唆された。
712	プレドニゾロン	一般集団と比較して、関節リウマチ患者は卒中発作のリスクが高く、プレドニゾロンの使用で高まることが示唆された。
713	イブプロフェン	慢性心不全の既往のある患者において、イブプロフェンを含む非選択的NSAIDsの服用により、死亡率・慢性心不全や心筋梗塞による再入院率が高まることが示唆された。
714	エストラジオール	現在または過去にホルモン補充療法を受けている患者において、髄膜腫のリスクが高まることが示唆された。
715	リツキシマブ（遺伝子組換え）	HIV関連非ホジキンリンパ腫患者150例を対象としてR-CHOP療法とCHOP療法を比較したランダム化PhaseⅢ試験において、R-CHOP療法群で感染症による死亡率が高かった。
716	塩酸ミトキサントロン	化学療法歴のない転移性乳癌患者386例を対象としたランダム化比較試験において、シクロホスファミド、ミトキサントロン、カルボプラチンの化学療法と自家幹細胞移植の併用群と標準化学療法群を比較したところ、前群で5例が感染、1例が肝不全、1例がうっ血性心筋症により死亡した。
717	メトトレキサート	メトトレキサートを投与されているリウマチ患者60586例と対象とした医療保険請求データベースを用いた後ろ向き研究において、119例に消化管穿孔が認められ、下部消化管穿孔の方が、上部消化管穿孔よりも発現頻度が高かった。
718	ベバシズマブ（遺伝子組換え）	高齢の進行期非扁平上皮非小細胞肺癌患者224例を対象とした部分集団解析において、パクリタキセル/カルボプラチン群とパクリタキセル/カルボプラチン+ベバシズマブ群を比較したところ、前群では感染と心虚血で各1例が、後群では2例が喀血、2例が感染、1例が発熱性好中球減少症、1例が吐血、1例が脳虚血で死亡した。
719	ホリナートカルシウム	動脈内化学療法を受けた進行膵癌患者211例を対象としたレトロスペクティブ研究において、1例が突然死により死亡した。

	一般的名称	報告の概要
720	メトトレキサート	脳卒中と診断されていないリウマチ患者33191例とコントロール99570例を対象としたコホート内症例症例対照研究において、メトトレキサートにより脳卒中が増加することが示唆された。
721	パクリタキセル	製造販売業者が作成した定期的安全性最新報告において、パクリタキセルを含む多剤併用化学療法を受けた患者において急性骨髄性白血病の報告頻度が上昇したことが報告された。
722	ロラゼパム	透析患者において、フルラゼパムを含むベンゾジアゼピン系製剤を使用している患者において死亡率が高まることが示唆された。
723	塩酸プロカルバジン	BEACOOP(ﾌﾞﾚｵﾏｲｼﾝ、ｴﾄﾎﾟｼﾄﾞ、ﾄﾞｷｿﾙﾋﾞｼﾝ、ﾌﾟﾚﾄﾞﾆｿﾞﾝ)療法を受けた進行期ホジキンリンパ腫男性患者38例を対象としたプロスペクティブランダム化試験において、治療後に精液濃度の低下が認められ、無精子症や射精困難症が増加した。
724	塩酸プロカルバジン	ホジキンリンパ腫女性患者518例を対象としたコホート研究において、放射線単独療法と比較し、化学療法、特にプロカルバジンやシクロホスファミドの使用により早期閉経が増加することが示唆された。
725	クロルジアゼポキシド	透析患者において、フルラゼパムを含むベンゾジアゼピン系製剤を使用している患者において死亡率が高まることが示唆された。
726	インターフェロン　ベーター1a(遺伝子組換え)	少なくとも3ヶ月のインターフェロン　ベータ(IFNB)またはglatiramer acetate(GA)治療を受けた再発寛解型多発性硬化症患者190例を対象とした解析において、IFNB投与により脊髄での再発が多かった。
727	フェノバルビタール	数々の疫学データより、てんかん患者の自殺率は一般集団に比べ5倍高く、側頭葉てんかん及び複雑部分発作は約25倍高くなることが示唆された。
728	フェノバルビタール	105名のてんかん患者を対象として、自殺行為の危険因子の性差を調査したところ、女性の方が自殺の危険性が高いことが示唆された。
729	フェノバルビタール	43名のてんかん患者(6-16歳)を調査したところ、フェノバルビタール投与患者では、カルバマゼピン投与患者と比較して、大うつ病及び自殺念慮の有病率が高いことが示唆された。
730	インターフェロン　ベーター1a(遺伝子組換え)	少なくとも3ヶ月のインターフェロン　ベータ(IFNB)またはglatiramer acetate(GA)治療を受けた再発寛解型多発性硬化症患者190例を対象とした解析において、IFNB投与により脊髄での再発が多かった。
731	リン酸オセルタミビル	2007/2008シーズンに欧州でオセルタミビル耐性ウィルスが検出され、特にノルウェーで高頻度に認められた。
732	カゼイ菌製剤	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
733	エストラジオール	閉経後にホルモンを使用していた女性において、乳癌となるリスクが増加し、中でも1日2drink以上アルコールを摂取している場合は乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
734	エストラジオール	現在または過去にホルモン補充療法を受けている患者において、髄膜腫のリスクが高まることが示唆された。
735	エプレレノン	4-16歳の小児高血圧患者304人において、エプレレノンを投与する二重盲検試験を行ったところ、小児に対するエプレレノンの有効性は見られなかった。

	一般的名称	報告の概要
736	塩酸バンコマイシン	米国で7例目のバンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌が確認された。
737	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	経口避妊薬の使用歴が長い(10年以上)または最近使用している(10年以内)女性において、乳房腫瘍の発生を促進する可能性がある。
738	塩酸イリノテカン	進行性非小細胞肺癌の韓国人患者81例を対象としたイリノテカン/シスプラチン併用化学療法の第Ⅱ相試験において、有機アニオン輸送ポリペプチドIB1(OATP1B1)の遺伝子多型を持つ患者で重度の好中球減少症や重度の下痢の発現率が高かった。
739	トレチノイン	肺気腫患者130例を対象とした無作為化二重盲検試験において、全trans型レチノイン酸投与により高脂血症を発現する可能性が示唆された。
740	プレドニゾロン	慢性リウマチ患者において、プレドニゾロンを経口で中用量(7.5mg以上/日)、6ヶ月以上服用した群は、非曝露群、3ヶ月未満の曝露群、低用量(7.5mg未満/日)を6ヶ月以上使用した群と比較して高血圧のリスクが高まることが示唆された。
741	イブプロフェン含有一般用医薬品	慢性心不全の既往のある患者において、イブプロフェンを含む非選択的NSAIDsの服用により、死亡率・慢性心不全や心筋梗塞による再入院率が高まることが示唆された。
742	エポエチンα(遺伝子組換え)	がん患者の貧血治療に関するPhaseⅢ試験89試験のオーバービューにおいて、がん患者に対するエリスロポエチン製剤の投与が静脈血栓塞栓症のリスクを増加させることが示唆された。
743	ダルベポエチン アルファ(遺伝子組換え)	がん患者の貧血治療に関するPhaseⅢ試験89試験のオーバービューにおいて、がん患者に対するエリスロポエチン製剤の投与が静脈血栓塞栓症のリスクを増加させることが示唆された。
744	リツキシマブ(遺伝子組換え)	再発濾胞性リンパ腫患者17例を対象としたリツキシマブ/フルダラビン/シクロホスファミド併用療法の第Ⅱ相臨床試験において、6例に重度の遷延性血小板減少症が発現し、高齢者の方が有意にリスクが高かった。
745	塩酸バンコマイシン	一医療機関においてバンコマイシン中等度耐性が2菌株報告された。
746	塩酸シナカルセト	シナカルセト投与中の患者6例を対象とした各種パラメーターの変動追跡において、シナカルセト長期投与後の中止は副甲状腺ホルモン分泌のリバウンドを起こすことが示唆された。
747	塩酸ミトキサントロン	ダウン症の急性骨髄性白血病患者57例を対象としたカルテ調査において、髄膜炎菌性菌血症、ファロー四徴症の無酸素発作、RSウィルス敗血症、肺水腫、うっ血性心不全、呼吸器疾患、原因不明で8例が死亡した。
748	耐性乳酸菌配合剤(1)	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
749	アプロチニン	オンポンプまたはオフポンプで心臓手術を受けた9106例を対象としたレトロスペクティブ研究において、トラジロールが術前にACE阻害剤を投与された患者でのオフポンプ手術後の腎機能障害リスクを増加させることが示唆された。
750	ボリコナゾール	12例の健常人を対象とした無作為化交差試験において、ボリコナゾールあるいはフルコナゾールがフェンタニルの消失時間を遅延させることが示唆された。
751	フルコナゾール	カルシニューリン阻害剤の静脈内投与を受けている同種造血細胞移植患者53例を対象としたレトロスペクティブ研究において、フルコナゾールの経口投与は静脈内投与と比較してカルシニューリン阻害剤の全平均血中濃度が上昇することが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
752	ビフィズス菌製剤	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
753	エポエチンβ（遺伝子組換え）	がん患者の貧血治療に関するPhaseⅢ試験89試験のオーバービューにおいて、がん患者に対するエリスロポエチン製剤の投与が静脈血栓塞栓症のリスクを増加させることが示唆された。
754	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	経口避妊薬使用者は、乳管癌発症リスクが高まることが示唆された。
755	セフトリアキソンナトリウム	帝王切開施行患者54例および婦人科手術施行例12例を対象としたプロスペクティブ研究において、術前の抗生物質投与で抗生物質が新生児に移行していることが示唆された。
756	アスピリン	網膜中心静脈閉塞症の患者144名において、多変量ロジスティック回帰解析により、アスピリンの投与がリスクファクターとなることが示唆された。
757	カベルゴリン	カベルゴリンを服用しているパーキンソン病患者は、服用していない患者と比較して、大動脈弁肥厚となるリスクが高まることが示唆された。
758	酪酸菌配合剤	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
759	乳酸菌製剤	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
760	エストラジオール	閉経後にホルモンを使用していた女性において、乳癌となるリスクが増加し、中でも1日2杯以上アルコールを摂取している場合は乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
761	ヨード化ケシ油脂肪酸エチルエステル	リピオドールを用いて12例に肝動脈塞栓療法を実施したところ、重篤な肝障害（ALT上昇）が3例に見られた。
762	耐性乳酸菌製剤（1）	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
763	耐性乳酸菌製剤（2）	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
764	ビフィズス菌製剤（4）	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
765	アセトアミノフェン	妊娠第1期のアセトアミノフェン曝露により、児での耳、顔面、頚部の先天異常、内側婁孔／洞/嚢胞の発現リスクが高まることが示唆された。
766	塩酸イリノテカン	70歳以上の日本人非小細胞肺癌患者37例を対象とした第Ⅱ相試験において、UGT1A1*6,*28について対立遺伝子を2つ以上有する患者ではAUC SN-38G/AUC AN-38比の有意な低下が認められ、白血球減少、好中球減少の発現が有意に高かった。
767	メシル酸イマチニブ	妊娠中にイマチニブ投与を受けた女性180例を対象としたレトロスペクティブ研究において、妊娠中のイマチニブ暴露により重篤な胎児異常、自然流産のリスクが増加することが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
768	コリスチンメタンスルホン酸ナトリウム	コリスチンを投与されたICU患者86例を対象としたレトロスペクティブな観察研究において、腎毒性が56例中24例に発生した。
769	塩酸ヒドララジン	ヒドララジンを妊娠SRH(高血圧自然誘発ラット)に妊娠10-20日まで連続投与したところ、胎児死亡、胎児の子宮体形成不全が見られた。
770	乾燥濃縮人活性化プロテインC	18歳以上のDrotrecogin alfa投与を受けた重症敗血症患者287例を対象としたレトロスペクティブ研究において、12例に重篤な出血が認められた。
771	塩酸ピオグリタゾン	多嚢胞性卵巣症候群患者30例を対象とした無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験において、ピオグリタゾン投与により腰椎、大腿骨頚部、大腿骨転子部の骨塩量が有意に低下した。
772	エストラジオール	ホルモン補充療法を長2年を越えて使用している患者は、6ヶ月未満の使用者と比較して乳癌による入院リスクが高まり、経皮剤より経口剤でそのリスクが高まることが示唆された。
773	エストラジオール	エストロゲン単独療法を6年以上行い、注視して6年未満の女性において子宮内膜癌発症リスクが高まり、エストロゲン単独使用を完全に中止した女性は、エストロゲン単独使用からエストロゲン・プロゲスチン併用療法に切り替えた女性よりも子宮内膜癌発症リスクが高まることが示唆された。
774	エストラジオール	経口エストロゲン、プロゲスチン併用療法を使用している患者は、貼布剤使用患者に比べ、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
775	エストラジオール	エストロゲン補充療法を40ヶ月を越えて使用している女性は、健常女性と比較して乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
776	エストラジオール	30-50歳の女性において、ホルモン補充療法使用者は、未使用者と比較して乳房異常の発生率が高く、乳癌のリスクが高まることが示唆された。
777	エストラジオール	マンモグラフィースクリーニングを受けた閉経後女性において、エストロゲン・プロゲスチン併用療法を5年以上している場合、乳癌発現リスクが高まることが示唆された。
778	エストラジオール	閉経前後の女性8161人を対象としたコホート研究において、ホルモン補充療法を使用している患者では乳癌、子宮内膜癌の発症が高まることが示唆された。
779	エストラジオール	新規子宮内膜癌患者591人を対象としたケースコントロール研究において、ホルモン未使用者と比べエストロゲンと周期的なプロゲスチン併用(10日＜/月)及び連続的なプロゲスチン併用により子宮内膜癌のリスクが高まることが示唆された。
780	エストラジオール	30－55歳の看護婦121700例を対象としたプロスペクティブなコホート試験において、閉経後のホルモン使用者は小葉癌とホルモンレセプター陽性腫瘍のリスクが上昇することが示唆された。
781	エストラジオール	45歳以上の女性看護士23178例を対象としたコホート研究において、エストロゲン・プロゲスチン併用療法を現在使用している患者では乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
782	エストラジオール	閉経後女性23618例を対象としたコホート研究において、エストロゲン・プロゲスチン連続併用療法使用者は、エストロゲンレセプター陽性乳癌との関連が高いことが示唆された。
783	エストラジオール	閉経後の看護し10874例を対象としたコホート研究において、ホルモン補充療法使用者は、未使用者と比べて乳癌発症リスクが高まり、ホルモンレセプター陽性乳癌のリスクが高まることが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
784	エストラジオール	閉経後女性を対象としたコホート研究において、エストロゲン・合成プロゲスチン併用患者では乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
785	エストラジオール	Million Women Studyの結果解析により、黄体ホルモン併用例、非HRT群と比較してエストロゲン単独投与で子宮内膜癌の危険性が増大することが確認された。
786	エストラジオール	40－67歳女性を対象としたコホート研究において、50歳以上の女性でホルモン補充療法を使用している場合、乳癌発症リスクが上昇することが示唆された。
787	エストラジオール	自然閉経女性において、10年以上のホルモン補充療法使用者は乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
788	エストラジオール	閉経後女性24697例を対象としたコホートを用いたネステッドケースコントロール研究において、ホルモン補充療法使用者は、エストロゲンレセプター陽性乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
789	エストラジオール	メタアナリシス研究により、ホルモン併用療法使用者では浸潤性乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
790	エストラジオール	メタアナリシス研究により、エストロゲン単独、エストロゲン・プロゲスチン併用療法を使用している患者では乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
791	エストラジオール	閉経後女性を対象とした多民族(アフリカ系アメリカ人、ネイティブハワイ人、日系アメリカ人、ラテン系、白人)コホート研究において、いずれの民族でもエストロゲン・プロゲスチン併用療法使用者は乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
792	エストラジオール	閉経後女性を対象としたケースコントロール研究において、プロゲステロンレセプター331A遺伝子をもつエストロゲン・プロゲスチン併用療法使用者は、乳管腫瘍とプロゲステロンレセプター陽性腫瘍発症のリスクが高まることが示唆された。
793	エストラジオール	40－69歳までの24479例の女性を対象としたプロスペクティブコホート研究において、最近のホルモン療法使用者では、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
794	エストラジオール	ケースコントロール研究において、エストロゲン療法を長期(140ヶ月以上)使用している患者は、17ヶ月未満使用している患者と比べ、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
795	エストラジオール	プロスペクティブなコホート試験において、閉経後ホルモン療法を最近5年以上使用してる患者では乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
796	エストラジオール	スタチン非使用者と比較して、スタチンを使用し、長期(6年以上)ホルモン補充療法を使用している場合、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
797	エストラジオール	31381例の閉経後女性を対象としたコホート研究において、エストロゲン補充療法使用者は卵巣癌発症リスクが高まり、5年以上使用している場合はそのリスクが上昇することが示唆された。
798	エストラジオール	閉経後女性103344例を対象としたコホート研究において、やせた(BMI<25kg/m2)女性でホルモン補充療法を使用している場合、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
799	エストラジオール	閉経後女性35456例を対象としたコホート研究において、ホルモン補充療法使用者では乳癌発症リスクが高まり、エストロゲン単独投与を受けている場合、子宮内膜癌発症リスクが高まることが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
800	エストラジオール	子宮非摘出でホルモン補充療法を使用している女性において、卵巣癌発症リスクが高まることが示唆された。
801	エストラジオール	ホルモン補充療法使用経験者は、未使用者と比較して卵巣上皮癌発症リスクが高まり、長期使用(10年<)によりそのリスクが上昇することが示唆された。
802	エストラジオール	エストロゲン長期(10年以上)単独療法使用者において、卵巣癌発症リスクが高まることが示唆された。
803	エストラジオール	米国黒人女性において、エストロゲン単独またはプロゲスチン併用ホルモン補充療法は乳癌リスクを上昇させ、痩せた女性(BMI<25)は、よりリスクが上昇する。
804	エストラジオール	50-69歳の閉経後女性296651例を対象としたコホート研究において、ホルモン補充療法使用者は乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
805	エストラジオール	SULT1A1*2遺伝子を持ち、エストロゲン補充療法を長期使用している場合、未使用者と比較して子宮内膜癌発症リスクが高まることが示唆された。
806	エストラジオール	閉経後エストロゲン単独療法を3年あるいはそれ以上の期間使用している女性では、ホルモン補充療法未使用者と比較して子宮内膜癌発症リスクが高まることが示唆された。
807	エストラジオール	乳癌の診断を受ける前の6ヶ月から6年までの期間におけるホルモン補充療法使用により、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
808	エストラジオール	46933例を対象とした多民族(アフリカ系アメリカ人、ネイティブハワイ人、日系アメリカ人、ラテン系、白人)閉経後女性のコホート研究において、エストロゲン単独療法使用者は、未使用者と比較して子宮内膜癌発症リスクが高まることが示唆された。
809	エストラジオール	50歳を超える女性において、ホルモン併用療法を6ヶ月を越えて使用している場合、エストロゲンレセプター陽性乳癌リスクが上昇することが示唆された。
810	エストラジオール	エストロゲン・プロゲスチン併用療法を使用している閉経後女性16608例を平均5.6年追跡し、浸潤性乳癌発現について調査したところ、本試験開始前にホルモン療法を使用している女性で、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
811	エストラジオール	アジア系アメリカ人女性において、エストロゲン・プロゲスチン併用療法を使用者は、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
812	エストラジオール	50-71歳の73211例の女性を対象としたコホート研究において、5年以上のエストロゲン単独療法使用者は、子宮内膜癌発症リスクが高まることが示唆された。
813	エストラジオール	閉経期または閉経後の女性12583例を対象としたプロスペクティブコホート研究において、エストロゲン・プロゲスチン併用ホルモン療法を現在使用している場合、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
814	エストラジオール	50-71歳の103882例の女性を対象としたコホート研究において、ホルモン療法を現在使用している患者において、子宮内膜癌発症リスクが高まることが示唆された。
815	エストラジオール	60歳以上の女性で閉経後ホルモン補充療法を使用している場合、血漿中の遊離エストラジオール、エストラジオールの濃度が高いと乳癌のリスクが高まることが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
816	エストラジオール	20-74歳の女性を対象としたケースコントロールスタディにおいて、エストロゲン・プロゲスチン併用療法により、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
817	イトラコナゾール	12例の健常成人を対象とした無作為化交差試験において、イトラコナゾール併用により、フェキソフェナジンのAUCが増加した。
818	クラリスロマイシン	一医療機関において、ビノレルビンを投与された非小細胞肺癌患者を対象とした後ろ向き研究において、クラリスロマイシン併用により好中球減少の相対危険度が増加した。
819	塩酸マプロチリン	うつ病と診断された患者において、抗鬱薬を現在使用している場合、脳血管事象が発症するリスクが高まることが示唆された。
820	イトラコナゾール	12例の健常人を対象とした自己対照試験においてイトラコナゾールとの併用により、イミダフェナシンのCmax,AUCが有意に増加した。
821	エポエチンα（遺伝子組換え）	人工膝関節形成術症例74例を対象とした貯血式自己血輸血の際のエリスロポエチンの使用群と未使用群の比較においてエリスロポエチン使用例では術後の出血量が有意に多かった。
822	インドメタシン	原発性水痘または帯状疱疹の診断を受けた患者の2つのコホート研究により、NSAIDs使用の場合、水痘および帯状疱疹ウイルス感染による重度の皮膚及び軟部組織合併症のリスクが高まることが示唆された。
823	塩酸ノルトリプチリン	うつ病と診断された患者において、抗鬱薬を現在使用している場合、脳血管事象が発症するリスクが高まることが示唆された。
824	マレイン酸フルボキサミン	うつ病と診断された患者において、抗鬱薬を現在使用している場合、脳血管事象が発症するリスクが高まることが示唆された。
825	ジクロフェナクナトリウム	非ステロイド性消炎鎮痛剤（NSAIDs）あるいはアセトアミノフェンによる治療をうけた50歳以上の患者において、NSAIDsとアスピリンの併用使用により、NSAIDs単独使用時に比べ、上部消化管に対する有害事象で入院するリスクが高まることが示唆された。
826	ホリナートカルシウム	術前化学療法としてFOLFOX4による治療を受けた結腸直腸癌の肝転移患者54例を対象としたレトロスペクティブ比較研究において、2例がGrade4の脂肪肝から肝不全にいたり、うち1例が死亡した。
827	ノルエチステロン・エチニルエストラジオール	新規乳癌と診断された女性150名を対象、健常女性を150名をコントロールとしたケースコントロールスタディにおいて、経口避妊薬の使用者は、乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
828	エストラジオール	卵巣癌と診断された女性を対象としたケースコントロールスタディにおいて、エストロゲン長期単独療法使用者では、上皮卵巣癌発症リスクが高まることが示唆された。
829	プロポフォール	ICUの重症患者において、プロポフォールを投与したところ、心不全をもつ患者群では、プロポフォールのクリアランスが低下することが示唆された。
830	アスコルビン酸	酸逆流モデルラットを用いた試験において、アスコルビン酸と亜硝酸ナトリウムを併用投与により食道癌発生が促進されることが示唆された。
831	マレイン酸フルボキサミン	うつ病と診断された患者において、抗鬱薬を現在使用している場合、脳血管事象が発症するリスクが高まることが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
832	ホリナートカルシウム	消化器癌患者105例を対象としたプロスペクティブ研究において、フルオロウラシル/ホリナートカルシウム群、フルオロウラシル/ホリナートカルシウム/放射線療法群、シスプラチン/フルオロウラシル群を比較したところ、フルオロウラシル/ホリナートカルシウム/放射線療法群で1例、シスプラチン/フルオロウラシル群で3例が死亡した。
833	プロピオン酸フルチカゾン	長期間(少なくとも7年間)吸入副腎皮質ステロイド治療を受けている患者において、大腿骨頚部の骨密度が減少することが示唆された。
834	エストリオール	閉経後にホルモンを使用していた女性において、乳癌となるリスクが増加し、中でも1日2杯以上アルコールを摂取している場合は乳癌発症リスクが高まることが示唆された。
835	ラクトミン	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
836	ベバシズマブ(遺伝子組換え)	腎有足細胞からVEGFを欠損させたマウスにおいて、重度の血栓糸球体障害が認められた。
837	フルコナゾール	12例の健常人を対象とした無作為化交差試験において、ボリコナゾールあるいはフルコナゾールがフェンタニルの消失時間を遅延させることが示唆された。
838	非ピリン系感冒剤(4)	15名の健康な披験者において、カフェインを含有しているコーラ種子とハロファントリンを併用したところ、ハロファントリンとその活性代謝物のAUC、Cmaxを減少させることが示唆された。
839	フルコナゾール	カルシニューリン阻害剤の静脈内投与を受けている同種造血細胞移植患者53例を対象としたレトロスペクティブ研究において、フルコナゾールの経口投与は静脈内投与と比較してカルシニューリン阻害剤の全平均血中濃度が上昇することが示唆された。
840	コンタクト洗浄液	ウサギにおいて、本剤で洗浄したコンタクトの使用により眼刺激が見られた。
841	コンタクト洗浄液	動物実験において、本剤で洗浄したコンタクトレンズを装着した際、眼に異物感が確認された。
842	塩酸ポリヘキサニド	ソフトコンタクトレンズ洗浄液でコンタクトを洗浄したところ、アカントアメーバ角膜炎となるリスクが高まることが示唆された。
843	染毛剤	本剤によると思われるアナフィラキシー性ショックを起こし、病院に搬送された1例。
844	コンタクト洗浄液	ソフトコンタクトレンズ洗浄液でコンタクトを洗浄したところ、アカントアメーバ角膜炎となるリスクが高まることが示唆された。
845	栄養ドリンク	本剤を服用し、蕁麻疹、アナフィラキシー様症状をきたした1例。
846	塩酸ポリヘキサニド	ソフトコンタクトレンズ洗浄液でコンタクトを洗浄したところ、アカントアメーバ角膜炎となるリスクが高まることが示唆された。
847	虫よけスプレー	子豚において、ディートとオキシベンゾンを併用して皮膚に使用すると、それぞれ単独使用の場合に比較して経皮吸収が上昇することが示唆された。

	一般的名称	報告の概要
848	薬用歯みがき類	アトピー性皮膚炎、アレルギー性皮膚炎の既往のある女児が、ポリオキシエチレンポリオキシプロピレングリコール(POEPOPG)を含有する歯磨き粉を使用したところアナフィラキシー反応をおこした。
849	カゼイ菌・ビフィズス菌製剤	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
850	乳酸菌製剤	重症急性膵炎患者において、プロバイオティクス投与群では、投与していない群と比較して多臓器不全、腸管虚血による死亡率が高まることが示唆された。
851	染毛剤	本剤によると考えられるアナフィラキシーを生じた1例。
852	コンタクト洗浄液	本剤の成分であるプロピレングリコールはアカントアメーバのシスト化を促すことが示唆された。
853	エチニルエストラジオール含有製剤	エチニルエストラジオール含有クリームを使用して子宮内膜の増殖、乳癌をきたした1例。
854	歯面塗布用クリーム	歯磨き類を塗布したところ、アナフィラキシーショックをきたした1例。
855	加水分解コムギ末	本剤の成分である加水分解コムギ末にが要因となり、使用すると手に水泡ができ、呼吸困難などのアナフィラキシーショックをきたした1例。
856	化粧品	本剤使用3日後に顔面の晴れを生じ、医療機関に3日間入院した1例。
857	乾燥濃縮人血液凝固第8因子	海外での訴訟に関する報告(当該製品は国内で流通していない)。
858	ウリナスタチン	スクレイピープリオン感染ハムスターを用いた異常プリオンの検出試験において、疾患末期に高率の異常プリオンが検出された。